



取材・文/大塚祐希事務所 撮影/高橋章夫

今井雅之

いまい・まさゆき

現代の若手漫才コンビが神風特攻隊へタイムトリップ！
「WINDS OF THE GOD」京都公演に先駆け、今井雅之氏に話を聞いた。

若者の青春に 今も昔もない

時は1999年夏、売れない漫才コンビ、アニキ（今井雅之）とキンタは、突然のバイク事故に遭遇する。意識が戻ると、そこはなんと終戦直前の神風特攻隊の基地。ふたりは特攻隊員として前世にタイムトリップしてしまったのだ！ 特攻隊員たちの間で芽生える友情。そして、平和な時代に生まれ育ってきたふたりの前に突然突きつけられる「死」。やがて一人、また一人と仲間が命を懸けて飛び立ち、いよいよアニキとキンタにも出撃の時が近づく……。

「WINDS OF THE GOD」は、突如、タイムトリップして特攻隊という特殊な状況下に置かれた若者たちを描いた芝居である。シニールでファンタジックな設定。今井氏はなぜ、特攻隊というシチュエーションを選んだのか？

「アイデアを練り始めたのは、今からもう12年前。正直言って、最初は特攻隊に悪い意味での憧れがありました。お国のために我が命を犠牲にするといういきさきをみたいなところに。特攻隊を素材に芝居を書くかと思いついてから、特攻隊について資料を調べたり、いろんな人に話を聞きました。実際に特攻隊員だった方とお話する機会もあり、今までの考え方が変わってきたんです。これまではお国のために命を捨てる特攻隊員を、ある意味スーパーマン化して見ていたんですね。でも、実際はそうじゃない。他の若者と同じように何かを求め、同じように悲しみ、恐れていたんです。時代は変わっても、青春像は今も昔も変わらないんじゃないかと。今井氏は半年間をインタビューや資料探しに費やす。調べものは特攻隊についてはもちろん、リーインカーネーション（輪廻）にまで及んだ。

「いろいろ調べているうちに、「オレって、もしかして、前世は特攻隊員だったのかも」と思うようになったんです。もし、そうだとしたら、特攻隊員だった自分に会ってみたいという気持ちもわき起こりましてね。「特攻隊員の自分に会って、止めたい」——それが、この「WINDS OF THE GOD」のベースにはなっています。今井氏は「WINDS OF THE GOD」の脚本をわずか1カ月と少しで書き上げた。

「確かに、神風特攻隊を描いてはいますが、自分では漫才師の物語だと思っています。いくつ時代が変わっても、青春像は同じ。ただ、神のいたすらによる風が吹いただけで、運命は変わってしまいます。この芝居は決して「死のぶつかり合い」ではなく、「生のぶつかり合い」だということ、観た人にはきっと伝わると思っています。」

